

イスラム地域研究・早稲田拠点「アジア・ムスリムのネットワーク」  
早稲田大学人間科学学術院・アジア社会論研究室 主催

## 第1回モスク代表者会議

2009年2月11日

於：早稲田大学・大隈記念タワー302会議室

# 「日本のムスリム・コミュニティを語る」

司会：早稲田大学社会科学総合学術院 小島宏

## プログラム

開会の挨拶

早稲田大学人間科学学術院 店田廣文

イントロダクション

早稲田大学人間科学研究科 岡井宏文

モスク代表者によるショートスピーチ

札幌モスク

大塚モスク

神奈川モスク

イスラミックセンター・ジャパン

イスラミックサークルオブジャパン

名古屋モスク

新居浜マスジド

戸田モスク

日本人ムスリムの概況…日本ムスリム協会・前会長 樋口美作氏

## テーマ・セッション

I. 「日本のムスリム・コミュニティの将来」

(モスク代表者・関係者による意見交換)

II. 意見交換・質疑応答

閉会の挨拶

早稲田大学人間科学学術院 店田廣文

## 解説

2009年2月11日、早稲田大学において早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室主催による、第1回モスク代表者会議「日本のムスリム・コミュニティを語る」が開催され、日本全国の主要なモスクや団体の代表者が参加して、活動の現状や日本のムスリム・コミュニティの将来について議論が交わされた。

ちょうど100年前の1909年2月には、日本のイスラーム社会に多大な功績を残したアブドゥルレシト・イブラヒムが早稲田大学の創設者である大隈重信と会談しており、会議はまさに100年目という節目の年に開催された。

現在日本には、外国人ムスリム約10万人、日本人ムスリム約1万人が居住しているものと推計され、全国各地にモスクも50カ所以上設立されている。ムスリム・コミュニティは、ここ20年程の間に急速に展開し、日々そのプレゼンスは高まっている。そしてそれと呼応するように、生活に根ざした問題群がムスリム、研究者らにより提出されてきた。教育・墓地・その他日本社会とのかかわり等など、今後乗り越えなければならない課題は多い。そして、ことムスリムについていうと、マイノリティとしての生は、自力での手厚いコミュニティ形成や、個人や家族による問題解決に委ねられている面が大きい。

そのような中であって、今回の会議は、各地の活動の現状や問題への対処方法などの情報を共有し、今後の活動に生かすことを目的として開催された。

会議では、まず7団体9名——大塚マスジド（永井彰氏、アキール・シディキ氏）、横浜および京浜地域（メイモン・モハマッド・アンワル氏）、イスラミック・センター・ジャパン（サリーム・ラフマーン・ハーン氏）、イスラミック・サークル・オブ・ジャパン（イシユラット・アリ・ハシミ氏）、名古屋・岐阜地域（クレシ・アブドゥル・ワハブ氏、シェル・アフザル・レカ氏）、新居浜および四国地域（浜中彰氏）、戸田マスジド（ライース・シディキ氏）——が地域での活動の状況について、発表を行った。これらに加えて宗教法人日本ムスリム協会前会長、樋口美作氏が「日本人ムスリムの概況」について発表を行った、

その後、発表内容を受けた形で、テーマセッション「日本のムスリム・コミュニティの将来」が行われた。テーマセッションでは、第2・第3世代ムスリムのムスリムとしてのアイデンティティ形成や、イスラームの継承の問題、地域社会におけるマスジドの役割のあり方、日本人ムスリムの状況など、重要な問題が取り扱われた。

各マスジド・団体の代表者からは、具体的な取り組みが提示され、これらの発言は代表者のみならず、オブザーバーの一般の日本人にとっても、イスラームとの共生を考えるうえで大いに参考になるものであり、このような問題を解決していく方向性についても議論が及んだ。多くの代表者からは、「現在は、各マスジドや団体が個別に問題と向き合っており、情報の共有や協働があまり活発ではない状況がある」との意見が提示され、「全国レベルでのマスジド・ネットワークの確立が急務である」こと、「日本の地域社会との相互理解・協働が不可欠である」ことなどが確認された。また、「とにかく外国人ムスリムが注目されているが、日本人ムスリムが、ムスリム・コミュニティ全体の先頭に立って活動して欲しい」との要望も聞かれた。

全国のマスジド・団体の代表者が一堂に会した会議は、これまで例がなく日本では初の試みであったが、会議の時間を延長して活発な議論が交わされただけでなく閉会した後も代表者らによる議論は続き、会議は大成功であったと言えよう。なお、主催者側は、礼拝スペースとウドゥの場も用意して、アスルとマグリブの礼拝も会議の休憩時間と終了後の時間を利用して、滞りなく行われた。また、休憩時間には、日本で作られているハラル・フードのお菓子などをリフレッシュメントとして用意したことも、このような性格の会議ならではのことであった。なお、全体の参加者数は、約55名であった。

2009年2月21日作成

文責：早稲田大学人間科学研究科博士後期課程 岡井宏文  
早稲田大学人間科学学術院教授 店田廣文